

Title	支倉六右衛門の教名：口繪の説明
Sub Title	
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.169(491)- 174(496)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

支倉六右衛門の教名

(口繪の説明)

(上)

こゝに擧げた二通の書狀はベネチヤの國立文書館 *Real Archivio di Stato* の所藏です。

(甲)はフールスカップ二ツ折、一面の大きさ縦二十七サンチ、横二十サンチで、二面に書いてある。宛名はベネチヤのドツヂ、差出人は支倉六右衛門ルイス・ソテロの兩名、日付は千六百十六年一月六日、差出した場所はローマです。本文はグリエルモ・ベルシエーの往時イタリヤに來りし日本使節 *Giulieno Berchet, Le Artiche Ambasciate Giapponesi* 一一七頁材料四九號、大日本史料第十二編の十二歐文材料三二八頁一六六號に、翻譯は同書邦文の部三七〇頁以下に出てゐます。ベネチヤに行きたいが、歸國の期が切迫して意に任せぬ

支倉六右衛門の教名(幸田)

から、使者を遣はして敬意を表すといふのが一篇の大意です。

(乙)はフールスカップ二ツ折、一面の大きさ縦三十四サンチ横二十一サンチで、一面に書いてある。宛名はベネチヤ元老院、差出人は前同斷、日付は千六百十六年二月二十四日、差出した場所はジエノアです。過日差出した使者の厚遇に對する謝狀で、本文はベルシエー一二二頁五〇號、大日本史料三三三頁一七〇號(手紙の一部の寫眞版を添ふ)、翻譯は同書邦文の部三七六頁以下に出てゐます。伊達政宗の遣使一件は、既に十分に研究せられましたから、何も加ふる所はありません。自分は前記兩通の書狀、その外大日本史料に載つてゐる有力なる材料若干を、去年本年二回の南歐旅行で幸に目撃しましたから、それを御披露します。

(四二)

慶長十八年九月四日付で、政宗からセビーヤ市に送つた文書は、同市市役所の二階にある文書館に陳列されてゐる。縦三十七センチ横九十五センチ四、金泥で草花の模様を描き、金銀の箔を天地に施した鳥の子紙に書いてあります。大日本史料和文の部八三頁にその挿畫と本文とが見えます。

慶長十九年八月廿六日付で、支倉六右衛門からド・レルマ公宛に送つた書狀二通を、スペインのシマンカス文書館で見ました。兩通共縦三十二センチ横四十八センチの紙を二つ折にし、上下二段に書いてあります。本文は大日本史料邦文の部一三〇頁以下にあります。實物を見ると六右衛門の花押と印形とがあつて、印形は直徑二センチ八、青肉を使つてあります。非常に面白く感じて寫眞をとりたく思つたのですが、何しろシマンカスといふ所は宿屋らしい宿屋もないといふので、前日マドリッドからパリヤドリイまで来て一泊し、翌日雪を踏んで出かけた位の邊鄙な地で、文書館には古城の建築物が應用されてゐる。従つて寫眞師など土地にあらう筈は無く、折角の希望も

水泡となりました。尙同館で千六百十四年九月廿六日付、ルイス・ソテロからド・レルマ公に上つた長文の書狀をも見ました。本文は大日本史料一〇八頁以下にあります。それを見てもソテロが決して信仰一方の僧侶で無く、立派な策略家であつたことが分ります。元來がセビーヤ生れで、サン・フランシスコ派の僧侶となり日本に渡り、甘く芝居を打つて日本の使節をローマに案内することゝなつた。新スペインからスペインに渡るには、セビーヤに上陸するのが順序でせうが、其所がまたソテロの故郷であるので、同地に於ける歓迎は非常なもので、ローマ市に入つてから教皇は一時ソテロをカーデナルに任命しようと思案された位でした。この邊がソテロ得意の絶頂で、二度目に日本へ渡つてから間も無く捕縛となり、長崎の牢屋に繋がること二年、千六百二十四年八月廿五日大村附近で火炙となり、殉教者として最期を遂げてゐます。彼の一生を通覽すると、策略家といつては或は酷かも知れぬが、したたかな遺手であつたことは何人も容易に首肯するであらう。

さて今度ベネチヤで見た文書には、二通とも支倉六右衛門及びブルイス・ソテロの署名があります。シマンカス文書の支倉六右衛門の署名は毛筆、これはペン書といふだけの相違で、印形は生憎之にはありませんが、そのかはり六右衛門の教名が(甲)にとんひりへい、(乙)に□ひりつへ□□とあります。六右衛門はマドリッド滞在中洗禮を受け、教名をドン・フィリツポ・フランシスコ Don Filippo Francisco といつたのですから、(甲)のとんひりへいはドン・フィリツポでよくわかりますが、(乙)の最初の一字は原本に破損があつてよく分りません。久米邦武氏は古く米歐回覽實記に之を凡と読み、凡ひりつへどんと書き、大日本史料もその通りに読んで居ます。凡の字を以てドンに宛てた例は外にもありますから、凡ひりつへは即ちドン・フィリツポで、六右衛門の教名にびたりと合ひますが、文字の形からいつて果して凡と読めるでせうか。最初の文字を凡と読み、さうして最後の文字をどんと読むとすれば、ドン・フィリツポ・ドンとなり、ドンが上下につく。之はどんな

支倉六右衛門の教名(幸田)

ものかと思ひます。が、自分には未だ良い考がつかないのです。

政宗から教皇に贈つた慶長十八年九月四日付の書状は、大日本史料にはバチカン圖書館文書とありますが、現在は伊東・鈍・満所外三名連署の千五百八十五年七月二日付の書状と一緒に、ガラス箱に入れて、バチカン博物館の一室、即ち鈍・満所一行ラテラン宮謁見行列の壁畫のある一室に陳列されてゐます。用紙といひ、字體といひ、セビヤの市役所にあるものと全然同一です。文書の側に置かれてある袋は如何にも古風なもので刷箔をした切地の上に、白、茶の色系で上段に梅花、下段に×の模様を刺繡し、中段色紙形の輪廓の中に九曜の星がぼんやり見えます。文書を箱に入れ、更にこの袋に入れたに相違ないと考へました。この文書のラテン譯文の寫眞が大日本史料に出てゐるので、それを示して所在を尋ねましたが、遂に見ることが出来なかつたのを遺憾とします。併し申すまでもなく之は何所にか保存せられて居るのでせう。

最後に自分の失策を一つ白状します。大日本史料にある支倉六右衛門の銅版の畫像は、小學校の教科書にまで轉載されてゐる程有名なもので、原物はアンジエロ圖書館所藏です。現に自分は二度まで同圖書館に行きながら、他の書物に氣を取られて、遂にこの銅版畫を見なかつた。去年バリヤドリに宿りながら、同所にあるコロンバスの最期の部屋を見なかつたと同様、飛んでも無い失策でした。併し自分の注意力を吸収して、この失策を演ぜしめたものは何でせうか。いづれ申上げる機會があると思ひます。

(下)

伊達政宗の遣使一件に關し、西洋の側で纏まつた書物といへば、第一にシヒオネ・アマチの「伊達政宗遣使録」を推さねばなりません。この書名は大日本史料によつたので、原書の題名はコルヂエーの日本書志二八三段に出てゐます。千六百十五年ローマの出版で、クォート版、前付八丁、本文七十六頁、それ程珍本でもない見え、自分は

先年イタリヤの某書林から一本を買求めました。

この書にドイツ譯のあることは、バジエスの目錄にも、コルヂエーの目錄にも書いてあるが、バジエスは書名を擧げず、コルヂエーは擧げてはあるが、實物を見たのでなく、單に他の目錄から書名を抄出したに止まり、甚だ不完全です。先日當地ナイホフの古書目錄五三七號に判然出てゐましたから左に記します。定價二百二十五グレンでは、所謂高嶺の花で、私共にはどうにもなりません。

Amati, Sc., Relation unnd gründtl. Bericht von desz Königreichs Voxu in Japonischen Keyserthumb gottseltiger Bekehrung, unnd dessentwegen ausgefertigter Ambasciada an Pöbst Paulum V und an Philipp III, König in Hispania, 1615. Durch Lud. Sotelum und Roc. Faxeurra. (A. d. Ital.) d. Th. Hendschelium. Ingolstadt, F. Angermayr, 1617. Av. titre gravé, portrait et 1 grav. 4to. 225.—

アマチは一行の通譯となつた位の人ですから、その著述は事件の經過を手際よく一部に纏めて書

いてあるのですが、何しろ事件が事件ですから、右の外當時色々の小冊子が出た。善くいへば根本材料、悪くいへば際物で、その方が實は珍物です。尤もローマに行けば同一物を二ヶ所又は二ヶ所以上の圖書館で認めますが、それはローマだけの話で、外には滅多に無い。矢張珍本たることを失ひません。その中自分が見た一つは、

ACTA AVDIENTIAE/PUBLICAE/AS. D.
N. PAVIOV./PONT. OPT. MAX/REGIS
VOXU IAPONI/LEGATIS/Romae de iiji. No
v-embris in Palatio Apo-/stolico apud S. Petru
mexhibitae,/MDCXV

で、版元はデヤコモ・マスカルチ Giacomo Mascardi 即ちアマチの出版者と同一人です。縦二十二サンチ、横十六サンチ二、紙數はタイトルルペーヂを入れて僅かに十二頁、全文は大日本史料第十二編の十二歐文の部百八號に、また同書邦文の部にその要點を翻譯し、書名を「千六百十五年十一月三日サン・ピエトロ寺側の法王宮に於て日本奥州の大使がバオロ五世に謁見せし顛末の記」と附けてあ

ます。自分の見た本は前申す通り十二頁で、ヘトリ、ストロツェーの演説で——終つてゐますが、大日本史料にはその後の記事が十數行あります。第二は

RELATIONE/DELLA SOLENNE ENTRATA/FATTA IN ROMA/DA D. FILIPPO FRANCESCO/FAXICRA,/CON IL REVERENDISS. PADRE/FRA LVIGI SOTTELO/Descalzo dell'Ordine Min. Offer./AMBASCIADORI PER IDATE/Massanne Re di Voxu nel Giappone./Alla Santità di N. S. Papa PAOLO V./l'Anno XI. del suo Pontefcato.

出版者は前と同人、出版年代も前と同一です。タイトルルペーヂを入れて僅に八頁、大日本史料歐文の部百號に全文を掲載し、邦文の部にその翻譯を載せ、書名を「日本奥州の王伊達政宗の大使ドン・フライツポ・フランシスコ・ハセクラ及びバードレ・フライ・ルイス・ソテロのローマ入市式の記」と附けてあります。行列に加はつた日本人の名が、原語の發音のまゝ片假名でかゝれてあるには、日

本名の判明せぬ爲でせうが、残念に存じます。

前記二點は他の二書と合綴せられ、O—3—28といふ番號で同ローマ市アンジェリカ圖書館にあり、また後者はV—VII—104の番號でバチカン圖書館にもあります。圖書館の函架番號を記すことは無用の様に見えますが、見たいと思ふ書物がこの圖書館にありと分つてゐながら、番號が分らぬために無益に時間を費した苦い經驗を持つてゐる方々は屹度賛成して下さるでせう。

明治六年岩倉大使の一行がベネチヤの文書館で支倉六右衛門及び伊東鈍滿等の書狀を見て、深く興味を惹かれた事は、米歐回覽實記で推察せられますが、一行を案内した同市の市長グリエルモ、ベルシエーも亦この時から伊東支倉兩使節の事蹟を研究し、「往時イタリアに來りし日本使節」といふ標題で、アルキビヨ・ベネト第十三四卷に發表した論文が、千八百七十七年に一部の本となつてゐます。今度イタリア旅行中に之を得たことは一つの愉快でしたが、ベルシエー以後更に多數の新文書を蒐集し、これを發表してあるボンコンパニ

・ルドビジの「ロトマに來りし最初二回の日本使節」[Francesco Boncompagni-Ludovisi Le prime due Ambasciate dei Giapponesi a Roma (1585—1615) MCMIII]は何の本屋を搜しても無く、ローマの知人に懇ろに依頼してはありますが、未だに手に入りません。著者は貴族ですから、最初から本書は非賣品であつて、傳本が少いのかと思ひます。ソテロが信仰一方の僧侶でなく、政治的手腕を持つてゐた。自分を派遣した奥州王は、家康百年の後天下を承繼ぐ人であるといふやうな法螺を臆面なく吹いてゐる。大日本史料に記載された同人の手紙を讀むと、彼の傳記を一層深く知りたくなる。セビーヤの市役所の二階で一覽したロレンゾ・ペレスのソテロ傳 Lorenzo Pérez. Apostolado y martirio del B. Luis Sotelo en el Japon (Archivo Ibero-Americano)を得るべく、今精々盡力してゐます。

昭和四年八月

ハーグにて

幸 田 成 友